

横浜市青葉区稲荷前 16 号墳出土土器の 年代とその評価

古屋 紀之・上山 敦史

1. はじめに

今回出土土器を紹介する稲荷前 16 号墳は、神奈川県横浜市青葉区大場町に所在する神奈川県指定史跡稲荷前古墳群中の 1 基である。赤彩された底部穿孔壺を複数個体含む出土土器群が知られており、古くは『古代のよこはま』にて出土土器の集合写真（写真 1）や各個体の個別写真、出土状況写真が公開されており（鈴木 1986）、横浜の前期古墳を語る上では欠かせない重要な資料となっていた。その後も、横浜市歴史博物館の企画展『横浜の古墳と副葬品』（平野 2001）で展示され、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団によって編集された図説『横浜の歴史と文化』においても集合写真が紹介されたが（鈴木 2009）、正式な報告書が未刊行という事もあって、実測図が公表されてこなかった（註 1）。

本稿では、その資料の重要性を鑑みて、稲荷前 16 号墳出土土器のうちの主なものについて実測作業を行い、資料紹介を行うものである。なお、執筆分担は各文の末尾に示した。（古屋）

2. 稲荷前古墳群の内容

稲荷前古墳群は、横浜市北部域を流れる鶴見川上流域（谷本川）左岸の間近に突き出た標高 50m の丘陵



写真 1 稲荷前 16 号墳出土土器集合写真（鈴木 1986）

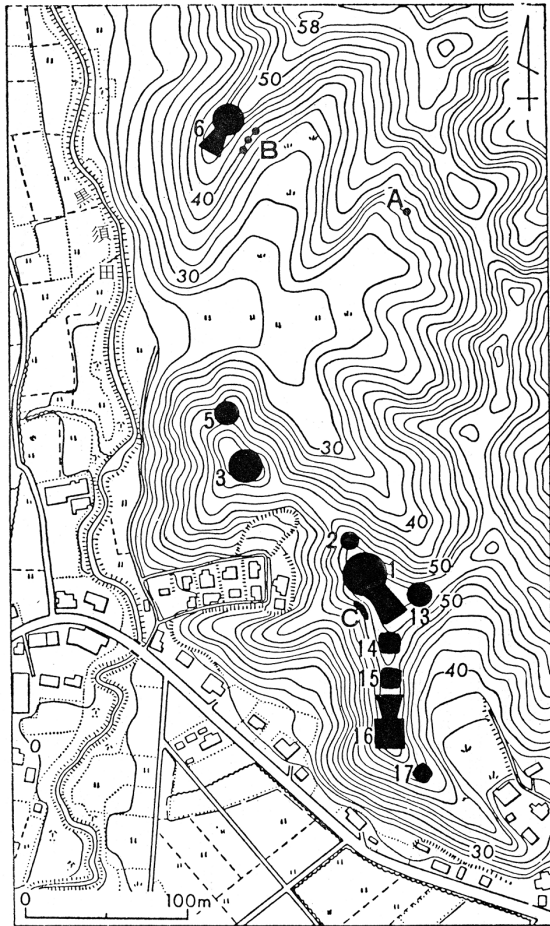


図1 稲荷前古墳群全体図（坂本 1986）

に谷を挟んで北側の尾根上に6号墳（前方後円墳）が立地する。その他、古墳群が立地する丘陵斜面にA～Cの3群（9基）の横穴墓群が見つかっており、前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳・横穴墓というように、一古墳群でバラエティーに富んだ墳墓形態を見ることができ、「古墳の博物館」と俗称されていた（図1）。なお、これらの古墳以外に付けられた番号は、調査の結果により古墳として認定されなかった地形に付けられた番号で、欠番となっている。

調査の結果から主な古墳の内容を確認すると、6号墳は32mの前方後円墳で、出土遺物は無いがバチ形に開く小さな前方部の形態から前期前葉（3世紀後半）の築造。16号墳は38mの前方後方墳で、本稿で紹介する底部穿孔壺の型式から前期前葉～中葉（3世紀末～4世紀初頭）（埋葬施設未調査）の築造。1号墳は46mの前方後円墳で後円部墳頂の粘土槨（7m）より玉類（管玉5、丸玉4）が出土し、墳形や玉類から前期後半（4世紀後半）の築造。3号墳は径20mの円墳で直葬木棺から直刀1本が出土し、5号墳は径11.4mの円墳で中央部から直刀1・鉄鏃1が出土。3・5号墳の裾からは鬼高式の土師器が出土し、後期（6世紀代）の築造と見られる。13号墳は径16mの円墳で砂岩切石の横穴式石室から直刀1・鉄鏃1が出土。14号墳は10m前後の方墳で、砂岩箱形石棺より青銅製耳飾2が出土。13・14号墳は後期～終末期（6世紀末～7世紀前半）と推定されている（坂本 1986 ほか）（註2）。

なお、これらの古墳がすべて現存しているわけではない。調査の前後を通して調査団や市民によって保存運動が行われ、市教育委員会と開発側で協議が行われたが、結局、主墳の1号墳を含む北側の古墳は全て丘陵ごと削平されたが、かろうじて南側の15～17号墳の3基のみは保存され、県指定史跡となっている。こ



写真2 稲荷前16号墳の墳丘（古屋撮影）

上に立地する。昭和42（1967）年に丘陵を削平する造成工事に伴う森林伐採時に、横浜市北部埋蔵文化財調査委員会の遺跡分布調査のメンバーらによって偶然発見された古墳群で、造成工事に先立って緊急調査された古墳群である（甘粕 1969 ほか）。

古墳群の内容は、鶴見川に近い南側の尾根上に17号墳（方墳）、16号墳（前方後方墳）、15号墳（方墳）、14号墳（方墳）、13号墳（円墳）、1号墳（前方後円墳）、2号墳（円墳）が立地し、そこから北西側に突き出た支尾根に3号墳（円墳）、5号墳（円墳）が立地し、さら

れら古墳の発見から保存運動・調査・破壊の経緯については調査を主導した甘粕健の報告に詳しいので、そちらを参照していただきたい（甘粕 1969）。
（古屋）

3. 稲荷前16号墳について

16号墳は全長32mの「前方後方墳」として認識されているが、通常の前方後方墳の特徴から逸脱する点がある（図2）。まず、長軸方向の立面形態であるが、尾根先端側に後方部を置き、前方部よりも後方部の方が若干低い。前期古墳の場合、通常は尾根上方に後方部を置き、低い前方部がそれに付随するが、その位置関係と高さが逆転しているのである。また、前方部の平面形に着目すると、後方部が一旦くびれて前方部がはじまり、前方部前端側（北側）に向けて幅を増大させていくが、途中で両外側に一気に開き、隅角を為して両辺が併行にというよりは、逆にやや幅を減じながら前方部前端辺に接続している。つまり、後方部との間に陸橋状の接続部を設けながら、「後方部」自体も前方部同様にやや台形気味の「方墳」としての形状を備えているのである。浜田晋介は、この状況を以て、方形墓と前方後方形墓の2基の墓が連結している状況を想定している（浜田 2000）が、両者の間の連結部も相応の高さを保っており、側面からの外観としては、やはり1基の前方後方墳としての形状を意識していると思われる。本稿では、やや不定形な前方後方墳として認識しておきたい。

なお、方墳状となっている「前方部」の南東隅は周溝が途切れて外部と陸橋によって接続している。その北側の後方部東側側辺の周溝中より、今回実測した土器のうちの多くが出土している。また、その反対側の西側の裾からも1の内湾二重口縁の底部穿孔壺が1個体出土している。その他、測量図には墳丘上にも土器の出土を示すドットが示されているが、詳細は明らかではない。
（古屋）

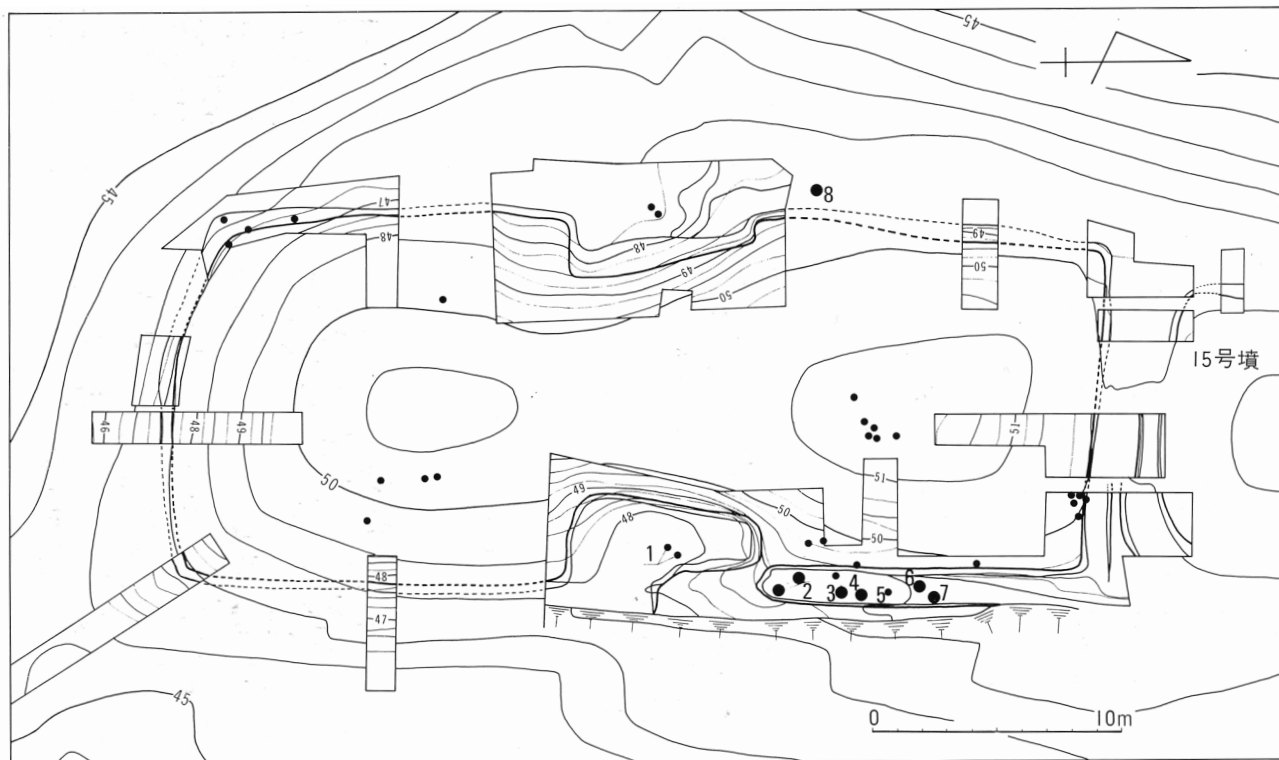


図2 稲荷前16号墳墳丘測量図（鈴木 1986）

※図中のドットのナンバーは『古代のよこはま』でのNo.に対応（本稿では（No.○）と表記）

4. 実測作業について

今回の実測作業は土器が保管されている横浜市歴史博物館の考古収蔵庫内で行った。図3・4に示した9個体の土器のうち、1～6の壺については、欠失部分に石こうが入れられて完形に復元されていることから、断面形状の実測が困難であると判断した。そのような事情から、この6個体についてはフォトグラメトリ（Structure from Motion / Multi View Stereo）の手法に拠る3D化をまず行い、その3Dモデルを参考にしながら実測図を起こす作業を行った。

利用したソフトはAgisoft Metashape Professional 2.0.3である。Metashapeで生成した3DモデルをCloud Compareで読み込み、正面図、断面図を作成した。写真撮影にはCannon EOS6D Mark II、SIGMA70mm F2.8 DG MACROを用いた。モデルは解析時間の短縮とCloud Compareで取り扱うことを考え、中程度で生成した。

SfM/MVSは多方向から撮影した写真をもとに3Dモデルを生成するため、写真撮影が最も重要であると言える。しかし、撮影の角度は人によって違うため、撮影担当者によってモデルの精度に若干の差が生じる可能性がある。そのため、発掘現場や整理作業で多用する場合は、撮影担当者は遺跡、遺構単位で統一することが望ましいと感じた。

また、今回3D化したような土器の場合、図4－6のような壺の場合、肩の内面はカメラの画角の中に入らないため、モデル化することが難しい。また、底部穿孔壺の場合は内面の撮影は可能ではあるが、頸部と肩の接合部分を十分に撮影することができず、図3－1・2は実際より胴部が数ミリ薄く表現されている可能性があったため、実物観察によって厚みを補正した。

本稿では、SfM/MVSを調査研究面で利用したが、普及啓発面でも利用されている。筆者らの所属する埋蔵文化財センターが調査した舞岡熊之堂遺跡においても検出された遺構を3D化している。この技術は多くの自治体・法人・研究機関で導入されており、活用例は枚挙にいとまがない。今後は、研究・普及啓発両面において、我々の想像を超える活用方法が出てくるはずである。

最後に実測図の起こし方であるが、原寸大でプリントアウトした断面・外面・内面の各画像を方眼紙の下に敷き、ライトボックスで光を下から照射させながら、外形・断面形状・稜線・文様・調整等をトレースして実測図を作成する。ただし、口縁や底部・基部などの形状の詳細については、先述の理由から実物との形状の相違がまま見られたことから、実物の観察や部分計測を行いつつ、実測図の内容を補完することとなった。

なお、作図作業における分担は以下のとおりである。

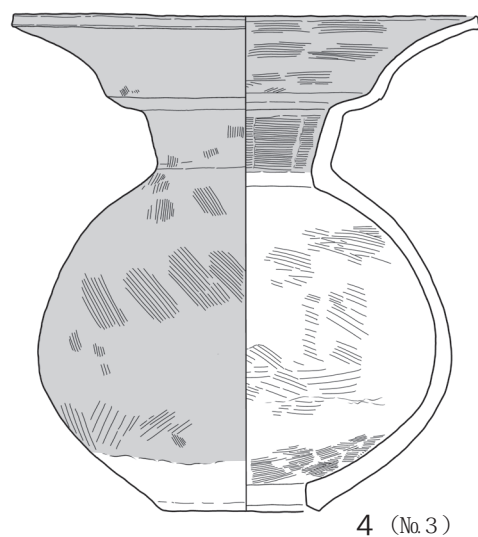
- (1) フォトグラメトリ用写真撮影作業＝上山・古屋
- (2) 3Dモデル生成および正面図・断面図の作成作業＝上山
- (3) 3D図面から実測図を起こす作業＝古屋
- (4) トレース作業＝古屋

(上山)

5. 稲荷前16号墳出土土器の内容

今回の実測図を図3・4に図示した。また図5には1～6の3Dモデルを示した。

まず、土器の出土位置は前述の通り、『古代のよこはま』（鈴木1986）の土器写真に付されたナンバーと、



0 10cm

図3 稲荷前16号墳出土土器実測図(1) (No.○)は『古代のよこはま』で付された番号を示す。

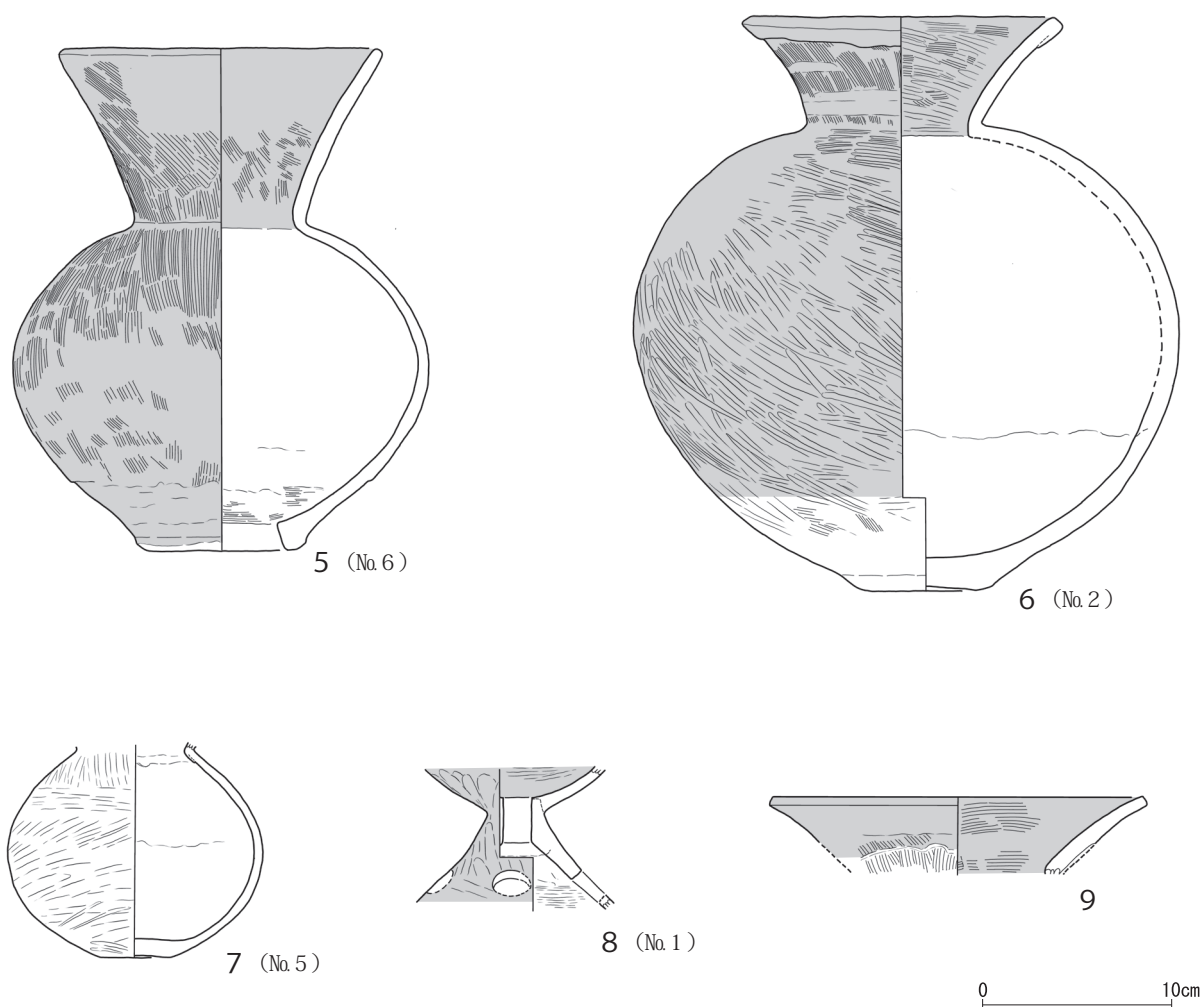


図4 稲荷前16号墳出土土器実測図(2) (No.○)は『古代のよこはま』で付された番号を示す。

同じナンバーのドットが落ちている測量図の対応関係で知ることができる。1の内湾二重口縁の底部穿孔壺のみが前方部西側裾から出土しており、他の3個体の底部穿孔二重口縁壺(2～4)・底部穿孔直口壺(5)・折り返し口縁壺(6)・小型壺(7)・坏部穿孔高坏(8)などの大多数の土器が前方部東側周溝中に浮いた状態で出土している。

各個体の特徴は観察表(表1)にまとめているのでそちらを参照してほしい。全体の様相をのべると、底部穿孔壺である1～5は、その全体的な形状や胎土・成形方法・器面調整方法・赤彩部位など多くの特徴を共有することから同系統の製作基盤上において製作されたと考えられる。9の口縁部破片は、完形品の外反口縁二重口縁壺3個体のいずれの個体とも径が合わず、なおかつ3個体とも口縁部の遺存率は高く、接合し得ない破片であるが、やはり同系統の製作基盤にあると評価できる。1は口縁部が内湾し、5は直口壺の形状を呈しているが、いずれも2～4・9の二重口縁壺と似たような特徴をもっている。まずはこれらを「底部穿孔壺群」と呼称し、その特徴を述べておきたい。

まず、これらの壺は先に述べた通り3種類の口縁部形状をもっているが、更に各個体の法量に統一性がないことが大きな特徴となっている。通常、この時期の墳墓出土の底部穿孔壺は、ある程度法量に統一性があり、規格品であることが特徴となっているが、本墳出土の底部穿孔壺はむしろ各個体の法量が意図的に徐々に小さくなるように(あるいは徐々に大きくなるように)ばらけて製作されているように見受けられる。

表 1 稲荷前 16 号墳出土土器観察表

番号	器種・形式	法量 cm	遺存率	成形・形態	外面調整・表面付着物	内面調整・付着物	胎土
1 (No. 8)	二重口縁壺 (内湾口縁・底部穿孔か)	器高(42.7) 口径26.8 頸部径11.5 胴径32.5 基部径推定9.5	口縁～頸部95% 胴上半60% 胴下半40% 基部 0%	基部がやや突出するが、胴部はほぼ球胴。最大径のやや下方外面に顕著な輪積みが残る。頸部はやや外開きの筒形でわずかな口辺部を有した後、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口唇部は上方面と外側上方面の2面の端面をもつ。口唇内面と口辺外面にやや粘土のはみ出しが見られる箇所がある。	口縁から胴下半までハケメのちナデおよび赤彩。胴下半はナデが顕著でなくハケメが良く残る。基部付近は上方からの粘土のなでつけが顕著で、ハケメ・赤彩は施されていない。ハケメは全体的に右下がりのナナメ方向。	口縁～頸部は横方向のハケメ後赤彩。ハケメが顕著に残る。胴部内面は横方向のハケメ後ナデで仕上げるが、上半は顕著にナデられているのに対し、下半はほとんどナデを施さずハケメが良く残る。	赤彩部位以外は淡褐色。胎土は軟質精良。混和材の砂粒は微小。
2 (No. 4)	二重口縁壺 (外反口縁・底部穿孔)	器高39.0 口径28.2 頸部径10.5 胴径31.0 基部径9.7	口縁～頸部100% (破損無し) 胴上半30% 胴下半70% 基部100%	胴外面下位と中位の境に顕著な輪積み痕と上方から下方に向かっての粘土のなでつけが見られる。また、胴外面中位と上位の境界や口辺外面と口縁外面の境界にも粘土のなでつけがみられる。胴部形態は上方と下方がややすばまり、球胴と言うよりはややソロバン玉形を呈する。頸部はやや外開きの筒形で、わずかな口辺部を経て外反する口縁部に至る。口辺・口縁の境界にはゆるやかな稜が存在する。口縁部外側には幅6mm程度の端面があり、櫛状工具による左下がりの斜めの刺突文がめぐる。基部の穿孔面は、上方が比較的垂直な面を持つのに対して、下方は外開きの面を持つ。底面は無い。	口縁部外面はナナメハケのちナデ後赤彩。とくに上半部はヨコナデが顕著。頸部はタデハケ後赤彩。胴上位～中位は右下がりのナナメハケ後一部ナデ後赤彩。胴上位は他に見られない粗いハケメもみられる。胴下位～基部は赤彩せず、ハケメがナデによってほぼ消されている。	口縁部～頸部はヨコハケ後一部ナデ後赤彩。口縁部付近はヨコナデ。胴部内面は一貫してヨコハケで丁寧に仕上げられている。頸部付近はナデ。	赤彩部位以外は淡褐色。胎土は軟質精良。混和材の砂粒は微小。
3 (No. 7)	二重口縁壺 (外傾口縁・底部穿孔)	器高32.0 口径25.8 頸部径9.5 胴径26.0 基部径8.5	口縁部100% 頸部60% 胴部90% 基部95%	胴部形態は基部まで含めてほぼ球胴。胴外面の下位と中位の境界に顕著な輪積み痕が残る。頸部は外開きの筒形でわずかな口辺部を経て外傾する口縁部に至る。口縁部は直線的に開き外反というより外傾。口辺部の側面には面があり、一部分を除いて口縁部との境界に明瞭な稜をもつ。またこの部分の内面側には匙面を有している。口縁の外側に幅7～8mm程度の端面があり、櫛状工具による左下がりの斜めの刺突文がめぐる。口唇部は外側上方にややつまみ上げられている。基部の穿孔部はやや外開きの面を持ち、底面は無い。	口縁部は横方向に近い右下がりのナナメハケ後ナデ後赤彩。とくに上半部はヨコナデが顕著。頸部はタデハケ後ヨコナデ後赤彩。胴部は最下位を除いて右下がりのナナメハケ後赤彩。部分的にナデも見られるが、他の個体に比べてハケメが顕著に残る。ハケメは細筋のものとの粗めのものが混在する。基部～胴最下部はハケメ後ナデ仕上げて赤彩しない。	口縁～頸部はヨコナデ後一部ナデ後赤彩。口縁部付近はヨコナデが顕著。胴部は一貫してヨコナデで丁寧に仕上げる。頸部付近はナデも見られる。	赤彩部位以外は淡褐色。胎土は軟質精良。混和材の砂粒は微小。
4 (No. 3)	二重口縁壺 (外反口縁・底部穿孔)	器高26.3 口径24.6 頸部径9.2 胴径(21.8) 底部径(8.4)	口縁部85% 頸部100% 胴部25% 底部15%	胴部形態は、基部がやや突出し、最大径がやや下がった位置にあるため、若干下膨れ気味の印象をもつ。頸部は若干外傾する筒形で、口辺部は他の個体と異なり、やや幅を持ち、内湾しつつ口縁部に至る。口縁部は外反し、口辺部との境界にはゆるい稜をもつ。口辺部には内面にもやや幅広い面をもち、口縁部との境界にはややはっきりとした稜をもつ。口縁端部外側に幅6～7mmの明瞭な端面をもち、上下につまみ出されて端面を拡張されている。ただし、No.2・3のような刺突文は見られない。基部の穿孔面は外開きで、それとは別に狭い底面がある。	口縁部は右下がりのハケメのち全体を顕著なヨコナデ。口辺部との境界付近のみタデハケが残る。口辺～頸部はタデハケ後顕著なナデ仕上げ。胴部は上半が右下がりのナナメハケ後部分的にナデ後赤彩。胴中位下半は左下がりの板状工具の側辺の押圧痕が連続して付けられ、その後赤彩されている。胴下位～基部はナデ仕上げで一部を除き赤彩されていない。	口縁～口辺は横方向のハケメ後ナデ後赤彩。頸部は横方向のハケメ後赤彩。胴部は一貫してヨコハケ。頸部付近はナデ。	赤彩部位以外は淡褐色。胎土は軟質精良。混和材の砂粒は微小。
5 (No. 6)	直口壺 (底部穿孔)	器高26.5 口径(17.0) 頸部径9.2 胴径22.0 底部径9.0	口縁部20% 胴部50% 底部95%	胴部形態は、底部がやや突出するソロバン玉形。胴中位と会の境界と、下位の中央付近に顕著な輪積み痕がみられる。屈曲した頸部から長い口縁部が外傾して伸びるが、口縁部上方はやや内湾気味。口唇部は丸くおさめる。底部穿孔面はほぼ垂直で、幅狭の底面がある。	口縁部は右下がりの粗いナナメハケ後赤彩。頸部付近は粗いタデハケ後赤彩。胴上位～中位は右下がりのナナメハケ(タデハケに近い角度)後一部ナデ後赤彩。胴下位はナデ後赤彩。	口縁部上半はヨコナデ後赤彩。口縁部下半は右下がりのナナメハケ後赤彩。胴上位～中位はナデ、胴下位はヨコハケメ。	赤彩部位以外は淡褐色。胎土は軟質精良。混和材の砂粒は微小。
6 (No. 2)	折返し口縁壺	器高30.4 口径16.8 頸部径9.3 胴径28.8 底部径7.0	口縁部90% 胴部95% 底部100%	胴部形態は、底部がやや突出するが、全体的に球胴を呈する。胴部内面の下位と中位の境界に明瞭な輪積み痕がみられる。口縁部は外反し、端部は外側に折り返す。口唇部には外傾する端面が存在する。底部は穿孔されず、底面はややくぼんでいる。	口縁折返し部と頸部付近はヨコナデ後赤彩。口縁中位はタデハケ後赤彩。胴上位～中位は右下がりのナナメハケ後右下がりの密なヘラミガキ後赤彩。胴下位は右下がりのナナメハケ後ナデ・ヘラナデ。底部はナデ。口縁から胴中位にかけて若干スデ付着か。	口縁部上半はヨコハケメ後、横方向の密なヘラミガキ。口縁部下半はヨコハケメ後縦方向のまばらなヘラミガキ。胴部はナデ及びヘラナデ。胴下半部が黒ずんでおり、所々コゲ付着。	赤彩部位以外は淡褐色。胎土はやや軟質。混和材の砂粒は1.5mm程度と、No.1～5に比べると大きい。外面に黒斑。
7 (No. 5)	小型壺 (口縁部形態不明、直口壺か)	胴部高11.0 頸部径6.7 胴径13.5 底部径3.8	口縁部 0% 胴部55% 底部100%	若干下膨れ気味の球胴を呈する。底部はややくぼんでいる。器壁が薄く、全体的に丁寧なつくり。	胴部ヘラケズリ後左下がりの密なヘラミガキ。底部ナデ。赤彩無し。	胴部上半しぼりめ、ナデ、指押さえ。胴中位～底部ヘラナデ・ナデ。	淡橙褐色。胎土は精良で混和材は微小。
8 (No. 1)	高坏 (結合部穿孔)	残存高7.6 結合部径3.0	口縁部 0% 坏部下半45% 結合部100% 脚部上～中位35%	裾広がりの脚部に内湾する口縁部が付く。脚部外面2箇所に円形スカシがみられ、本来は四方に空いていたとみられる。本来、器形は高坏だが、結合部に垂直方向の穿孔がある。	坏部板ナデ・ヘラナデ後赤彩。脚部板ナデ・ヘラナデ後ヘラミガキ後赤彩。	坏部粗いヨコハケ後ナデ・ヘラナデ。脚部上半はナデ、下半は粗いヨコハケ。	暗淡褐色。胎土はやや精良軟質。微小な雲母片を含む。
9	二重口縁壺 口縁部破片	口径(20.0)	口縁部破片資料	二重口縁壺の外反口縁。口縁端部外面に端面を持つ端面下方にやや突出している。端面には刺突文はみられない。	口縁上半部は右下がりのナナメハケメ後ヨコナデ後赤彩。下半部は剥離面にタデハケメがみられる。	口縁部ヨコハケメ後ヨコナデ後赤彩。	赤彩部位以外は淡褐色。胎土は軟質精良。混和材の砂粒は微小。

※番号欄の (No.○) は『古代のよこはま』(鈴木1986)で各個体に振られたナンバーを表す。

この法量の特徴については出土状況からみる使用方法とも密接に関連しているようにも思える。多くの場合、規格的な作りの底部穿孔壺は墳丘を圍繞することを目的として製作されるため、同様な法量で製作され、周囲に並べられるのであるが、本墳の場合は前述の通り前方部東側周溝中に集中して出土することから、圍繞配列を目的としたものではなく、むしろ特定の箇所集中して置かれた(あるいは使用された)ものであることを示唆している。よって、各個体の大きさを意図的に変えることで、配置される土器の景観に



図5 稲荷前16号墳出土土器3Dモデル（縮尺不統一）

変化をつけたものと想像される。その具体的な配置方法は不明であるが、ここでは通常の圍繞配列とは異なった目的を想定しておくに留めたい。

また、各個体は共通点も多いものも相違点も見られる。2～4の3個体の二重口縁壺においても胴部形態や口辺～口縁部の形状が異なっている他、口唇部にハケメ工具によると思われる刺突文の有無や、内外面に残る輪積み痕の位置から成形作業における乾燥工程の位置の差がある事などが挙げられる。

ただ、基本的な製作技法は良く似通っており、器面調整はハケメののちナデ調整が行われ、その後、外面は口縁部から胴中位まで、内面は口縁部から頸部まで赤彩される。この赤彩方法は布や素手で行われたとみられ、器面観察の結果、おそらくハケメ調整の上から直接行われて、入念にベンガラを塗布された部分のハケメが結果的に消されたと思われる。およそ胴外面中位や口縁部内面下位～頸部内面にかけてはハケメが良く残り、胴部外面上位や口縁部外面はハケメがほとんど残されていない。また、赤彩が施されない部位としては胴外面下位や胴内面上位はほとんどハケメが残らずナデや指押さえによって調整されているが、胴内面中位～下位はハケメが良く残る。

ハケメは横方向か右下がりが基調である。ハケメの幅は広めのものと狭いものの2種があり、個体によっては胴下位にさらに条線間隔の広いハケメが施されている。（古屋）

6. 二重口縁壺の評価と年代

ここでは、通常の二重口縁壺（2～4）について、その口縁部・頸部形態から系統や年代について考察してみたい。二重口縁の形状としては、やや外傾する筒形の頸部を持ち、口縁部と頸部との境に明瞭な口辺部を作り出す典型的な二重口縁の形状を有している。口縁端部を上下にわずかにつまみ出す技法や、2・3に見られる端部外面に刺突文を施文する手法は「伊勢型二重口縁壺」（田口 1981）の影響とみられるが、伊勢型二重口縁壺の頸部は外反形状を呈するのが通常であるので、本墳の二重口縁壺は、わずかに影響は見られるものの基本的に伊勢型二重口縁壺の範疇には含まれないものとして評価できる。

またもう一つの著しい特徴として、3・4にみられるような、口辺部内面の断面形状が、いわゆる「匙面」を呈することである。これは全ての個体に見られるわけではないので、偶然の産物かも知れないが、時期は降るものの同じような事例が神奈川県横須賀市長井町内原遺跡（横須賀市教委 1982）の出土土器の中にも見られるので、今後類例に注目する必要があるかも知れない。

以上のような、ややイレギュラーな特徴があるものの、頸部の形態としては通常の二重口縁壺と変わるものではなく、その形態的な特徴から年代を推定することは可能である。

二重口縁壺の形式的な分析は古屋が 1998 年の論考で初めて行っており（古屋 1998）、基本的な動向はつかめている。すなわち、筒形の頸部をもつ A 形式の二重口縁壺は、①直立する細い筒形の頸部を持つ、②次には筒の径が拡大して頸部が太くなり、③頸部の上方が開いて外頸する、④頸部が上部に伸び始める、⑤頸部が著しく上部に伸びて全体的な大きさも大きくなる、という変化を示し、現在では上記の各段階が新潟シンポ編年（＝漆町編年と同一の段階設定、日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993）の時期区分では①が 4～7 期、②が 8 期、③が 9 期、④が 10 期、⑤が 10～11 期ごろに対応していると考えている。

本古墳の二重口縁壺の頸部形態は②～③の段階に相当し、共伴している高坏（8）も東海系の廻間Ⅲ式の範疇に収まるものなので、廻間Ⅲ式後半に並行する新潟シンポ編年の 8 後半～9 期前半ごろに位置づけられよう。その時期はおおよそ古墳時代前期前葉と中葉の中間頃（3 世紀末～4 世紀初頭）に相当し、東日本において大型の前方後円墳が築造されはじめるころにあたる。（古屋）

7. 稲荷前古墳群の首長墓築造順序の再評価

稲荷前古墳群では主墳である 1 号墳が前期後半ごろに位置づけられると考えられ、本墳（16 号墳）はその直前の首長墓と位置づけられる。なお、撥形の前方部をもつ 6 号墳（前方後円墳）は出土遺物が皆無で年代的な位置づけが難しいが、他の古墳よりも奥まった位置にあり、前方部が未発達なことから、前期前葉～中葉の 16 号墳よりも先行する年代を想定しておきたい。古墳時代前期の首長墳の選地方法として、集落や生産域との関係でランドマークたり得る位置を選ぶ傾向があり、古い段階では河川本流の低地よりも、そこから枝別れた支谷に面した位置に築かれる場合が多い。それに対して前期中葉や後葉には次第に河川本流の低地や段丘を意識した立地が変わっていく。この現象は、治水・灌漑技術の向上により水田生産域が次第に河川本流側に移っていくことと、さらにこの現象に伴って集落域が台地上から段丘・低地に降りていく現象と機を一にしていると考えられる。横浜市北部の鶴見川流域では、弥生時代後期後半をピークにして、弥生時代終末期、古墳時代前期と時代を経るごとに台地上の住居件数が減少していく傾向が見られ、古墳規模が増大する前期後半や中期には台地上には集落がほとんど見られなくなることも、この現象の延長線で理解でき

るだろう。

(古屋)

謝辞

本稿を草するにあたり、坂本彰氏に調査当時の様子などについてご教示いただいた。また、稲荷前1号墳出土玉類についての年代観を斎藤あや氏にご教示を賜り、横浜市歴史博物館での資料調査については同館学芸員の橋口豊氏にお世話になった。末筆ながら感謝の意を表します。

註

註1 稲荷前古墳群の発掘調査時の記録資料は横浜市歴史博物館や（公財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターにおいても保管しておらず、将来報告書刊行の見込みが立たないため、せめて出土遺物の実測図公開だけでも行うべきとの考えから、今回実測作業と図の公表に踏み切った次第である。

註2 各古墳の年代については、前期前半の6号墳・16号墳については本稿の成果に沿って年代を推定し、1号墳は埋蔵施設から出土した玉類について斎藤あや氏に前期後半という年代観をご教示いただいた。中期以降の古墳については（坂本1986）の年代観を示している。

参考文献（発行年順）

- 甘粕 健・田中義昭ほか 1968「稲荷前古墳群の発掘調査 概要」『昭和42年度 横浜市北部埋蔵文化財調査報告書』横浜市域北部埋蔵文化財調査委員会
- 稲荷前古墳群調査団 1969「稲荷前古墳群調査経過」『いなりまえ』1～4
- 坂本 彰 1986「稲荷前古墳群」『緑区史 資料編』第二巻 緑区史編集委員会
- 甘粕 健 1969「横浜市稲荷前古墳群をめぐる諸問題」『考古学研究』1-6
- 三上次男・小川裕久 1978「稲荷前古墳群」『神奈川県文化財図鑑―史跡名勝天然記念物編』横浜市教育委員会 1979『稲荷前古墳群保存整備計画策定報告書』
- 田口一郎 1981「二重口縁壺の系譜の検討」『元島名将軍塚』高崎市文化財調査報告書22
- 横須賀市教育委員会 1982『長井町内原遺跡』横須賀市文化財調査報告書第9集
- 甘粕 健・山口隆夫 1982「横浜市緑区稲荷前16号墳の調査」『第六回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』
- 坂本 彰 1986「稲荷前古墳群」『緑区史 資料編』第二巻 緑区史編集委員会
- 鈴木重信 1986「15 鶴見川流域の古墳 稲荷前16号墳」『古代のよこはま』横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団編 横浜市教育委員会・横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993『東日本における古墳出現過程の再検討』
- 古屋紀之 1998「墳墓における土器配置の系譜と意義―東日本の古墳時代の開始―」『駿台史学』第104号
- 浜田晋介 2000「前方後円墳と円墳―川崎・横浜地域を例として―」『川崎市市民ミュージアム紀要』第13集
- 平野卓治 2001『企画展 横浜の古墳と副葬品』横浜市歴史博物館

鈴木重信 2009「埴輪の移り変わり」『開港 150 周年記念 横浜 歴史と文化』（財）横浜市ふるさと歴史財団編

古屋紀之〔（公財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター所長〕

上山敦史〔（公財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター調査研究員〕

追記：脱稿後、図 4－6 の壺胴部外面に籠目の痕跡が残っている事に気づいた（小橋健司氏・山本亮氏指摘）。図化する時間的余裕が無いため、その事実のみ記載しておく。